

インゲンマメ新品種『スノークロップ・リンダ』の 品種特性と栽培のポイント

雪印種苗(株)千葉研究農場 近江 公

1 はじめに

インゲンマメは食生活の西洋化に伴い、肉料理のつけあわせなどとしての需要が増し、また作物的にも比較的栽培管理が容易な上、播種から収穫までおよそ60日程度と短く、各地でいろいろな場面での作付が増えてきています。

2 さまざまな作型

全国的にみると図1のとおり、既に周年栽培が行われており、一年中どこかの地域から出荷されています。しかし、一年中栽培できる地域はなく、これら栽培環境の中で温度（気温）が最も重要な要因であることを示しています。

インゲンマメの生育適温は15～25℃で、比較的

冷涼・温和な気候を好みます。10℃以下では生育不良となり、軽い霜でも一晩で霜害を受け枯死してしまいます。反対に、30℃以上では花芽に障害が起こり、落花・落葉・変形莢の発生の原因となります。

従って、北海道あるいは東北・高冷地

地域	作型	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
北海道・東北・高冷地	春・夏まき露地栽培					○	—	○	■	■	■	■	■
	ハウス半促成栽培	○	○	—	■	■	■	■	■	■	■	■	■
一般平地	春まき露地栽培				○	○	—	■	■	■	■	■	■
	夏まき抑制栽培								○	○	—	■	■
西南暖地	ハウス促成・半促成栽培		○	—	■	■	■	■	■	■	○	—	■
	春まき露地栽培				○	○	—	■	■	■	■	■	■
	夏・秋まき抑制栽培									○	○	—	■

○—○ 播種 ■ 収穫

図1 インゲンマメの代表的作型



写真1 インゲンマメのハウス栽培風景



写真2 インゲンマメの露地栽培風景

では、一般平坦地で収穫の難しくなる夏場での出荷が可能であり、また冬期間比較的温暖な西南暖地では、多少の暖房をかけて冬場価格の高い時期にあわせて出荷して、全国的な周年出荷体制が確立されているといえます。

3 新品種紹介

弊社では、既に『スノークロップ・ネリナ』（旧称スノークロップ112）を昭和59年より販売しており、中京・京阪神市場を中心にその品質の良さを評価いただき、また各産地においてもその品種の特性を十分発揮して、すばらしいインゲンマメを出荷いただいております。

今回、新たにスノークロップ・ネリナより早生の品種として開発育成した品質の優れた多収品種『スノークロップ・リンダ』を発表しましたので紹介します。

◎「スノークロップ・リンダ」の品種特性

1) 早晚性

スノークロップ・リンダは早生品種です。中生品種であるスノークロップ・ネリナより開花では2～3日早い程度ですが、収穫始めから最盛期になるまでが早く、ネリナと比べて4～5日程度早く最盛期を迎えます。

2) 草姿

草丈は作型によって多少異なりますが、露地では50 cm 前後、ハウスでは60 cm 前後になります。



写真3 スノークロップ・リンダの草姿と莢

葉は丸葉で大きく濃緑で、草勢はかなり強く、特に低温時での初期生育はネリナが比較的ゆっくりであるのに対し、リンダはすばらしい生育を示します。

また一般に、早生系の品種は中生品種と比べて分枝の出方が一時的で、ネリナのように収穫最盛期になると分枝同士が入り込んだようになるのとは対照的に、リンダは整然とかつ閉鎖的に分枝が出てくるため密植適応性の高い品種だといえます。

3) 莢の特性

莢はくびれないすじなしの丸莢です。また莢色はネリナよりも濃緑で、莢肌がきれいです。ネリナは莢がスリムで、見た目に柔らかさと新鮮さをももたせていますが、リンダもネリナ同様莢は細めです。ただし、リンダのほうが莢の太りは

表1 各作型における収量および特性調査（昭和62～63年、千葉研究農場）

品 種 名	初 生 期 育	開花始 月 日	草 丈 cm	莢 色 9-1	曲がり 9-1	莢 長 cm	莢 幅 cm	上物莢 本/20株	上物莢 収 量 kg/a	平 均 一莢重 g	上物率 %
	9-1										
〈夏まき抑制栽培〉（昭和62年8月20日播種）											
スノークロップリンダ	5.0	9. 23	45.6	6.6	5.8	12.9	0.72	409	67.3	3.7	55.8
スノークロップネリナ	5.5	9. 26	48.8	6.4	6.0	13.0	0.71	390	58.2	3.4	53.5
K 品 種 (M社)	6.5	9. 22	52.4	5.0	5.0	12.3	0.76	338	61.9	4.1	59.7
〈ハウス半促成栽培〉（昭和63年3月8日播種）											
スノークロップリンダ	8.3	5. 5	57.0	7.1	6.7	13.4	0.78	412	87.5	4.3	77.0
スノークロップネリナ	6.3	5. 8	56.7	7.0	6.8	13.4	0.75	414	77.0	3.8	83.8
K 品 種 (M社)	7.3	5. 5	55.4	5.1	6.6	13.6	0.83	304	73.9	4.9	76.1
〈春まき露地栽培〉（昭和63年5月10日播種）											
スノークロップリンダ	7.0	6. 19	60.6	7.5	6.0	14.0	0.76	546	132.3	4.9	66.7
スノークロップネリナ	5.3	6. 21	61.8	7.0	6.3	14.1	0.74	515	114.6	4.5	78.6
K 品 種 (M社)	7.0	6. 17	64.0	5.6	6.0	14.7	0.86	470	146.0	6.3	71.1

評 点 基 準 初期生育：9(極良)—1(極不良) 莢色：9(極濃緑色)—1(黄緑色) 曲がり：9(極少)—1(極多)

収量調査期間 抑制栽培：昭和62年10月8日～11月2日 半促成栽培：昭和63年5月17日～6月13日

春まき露地栽培：昭和63年6月28日～7月18日

最終的には太くなってきますので、若莢を中心に収穫されたほうが秀品率はあがってきます。

莢の曲がりや、ネリナより若干多めですが、それでも秀品率はハウス栽培で8割近くにのぼります。

4) 収量性

表1のとおり、リンダは各作型において同じ早生系品種K (M社) と比べて上物莢数が極めて多く、またネリナと比べて平均一莢量が重いので、収量はどの作型においても上回っています。

特に、収穫最盛期の収量が極めて多く、ネリナのような長期間にわたって平均的に穫れるのではなく、一斉に穫れてくるタイプの品種です。

4 長期穫り品種と短期一斉穫り品種

図2は、今年当農場で実施したハウス半促成栽培での各品種の収量パターンを示したものです。

リンダは3回目の収穫の時が最も多収となり、その後は漸次減少していきます。一方、ネリナは穫れ始めから最盛期に至るまでゆっくりと進み、その後の収量もゆるやかに減少していきます。

インゲンマメの品種は、そのほとんどがアメリカ・ヨーロッパで品種改良され日本に導入されており、特につるなしインゲンの大部分は外国で改良された品種が多く、合理的な機械化農業を中心とする欧米にとってつるありインゲンは機械化収穫がしづらく、そのためつるの伸びないいわゆる矮性インゲンで莢の生育もできるだけ一斉に太る品種をつくりあげてきました。しかし、日本においては、つるあり同様、つるなしインゲンにおいても毎日畑での収穫となり、外国での品種改良の目的とは多少違った方向に進んでおります。

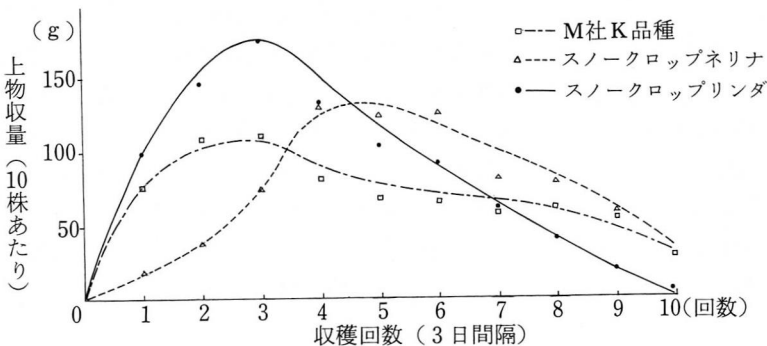


図2 ハウス半促成栽培における収量パターン (昭和63年, 千葉研究農場)

このように、機械化収穫にも適していると思われる短期一斉穫りタイプのリンダと、長期にわたって平均的に穫れるネリナとでは栽培する上で注意しなければならない点がいくつか挙げられます。

5 地域・作型にあった品種選定

1) 適作型

先にも述べたとおり、全国的には周年栽培がされていますが、各作型での重要となる品種の特性は少々異なっています。北海道・東北・高冷地の春まき露地、あるいは一般平坦地・西南暖地でのハウス栽培では収穫期間が比較的長くとれますが、反対に一般平坦地や西南暖地での露地栽培、特に夏まき抑制栽培では、収穫期間が降霜までの1カ月程度しかなく収量的には少ない傾向にあります。従って、収穫期間の短い時期の栽培、あるいは作付体系で他作物の間作として短期的に収穫する場合などは、リンダのような早期から収量があがってくる品種が有利となります。

一方、ハウス栽培など1カ月以上の長期栽培であれば、ネリナのような中生品種でも収量的には早生品種と変わらなくなりますので、どちらの利用も可能となります。

2) 作付面積

インゲンマメの栽培で、最も時間・労力を要するのが収穫・選別作業です。一般に、1回に作付できる面積は、1人で1~1.5aといわれており、特にリンダのような収穫のピークが集中するタイプの品種は、その時期に穫れる量が全体の50%近くになるので、1回の作付面積はできるだけ抑え、1人で1a程度にします。一方、ネリナは収穫の山がなだらかに続くので、1回に1.5a程度の作付が

可能です。従って、リンダで長期的に出荷する場合は、半月ごとに播種時期をずらし、収穫最盛期がぶつからないよう調整する必要があります。

3) 栽植密度

前述のとおり、リンダの草姿は分枝が一時的かつ閉鎖的に出てくるので、ネリ

ナのように収穫時期に枝がこみあうということはほとんどありません。従って栽植密度についても、リンダの場合は株間20~25cm程度と多少狭くしたほうが反収が上がります。(一般に、ネリナタイプの中生品種では株間30cm前後にします。ただし、ハウス栽培などの日照が不足気味で、また長期穫りをする場合は35cm程度の株間が必要となります。)

6 長期穫り栽培について

ハウス栽培を中心に、いわゆる2番花以降も利用する長期穫り栽培が各地で行われております。インゲンマメは樹勢さえ弱めなければ1回目の収穫(1番花、1次分枝の花芽を利用したの収穫)が終了すると、続いて新しい分枝(2次分枝)が出てきて2番花がつかます。この花を利用して収穫するのが2番花収穫です。通常1番花と2番花の間隔は、作型にもよりますが1カ月程度あきます。ハウス栽培では6~7月まで収穫が可能ですので、穫れ始めから2カ月以上の収穫期間があり、2番花あるいは3番花まで利用するケースが多くみられます。

2番花以降を利用する場合は、1番花の収穫最盛期に樹勢を回復するための追肥(N成分で2~3kg程度)と、また1番花収穫後に摘葉(古い葉から5~7割程度摘葉します)と灌水(通路、うね間にたっぷり)を行います。

どの品種も2番花以降を利用することはできませんが、樹勢が弱まるにつれて莢の品質が悪くなり、曲がりなどの下物莢が多くなってきますので、できるだけ樹勢の強い品種を利用します。

7 収穫 — 選別の徹底

収穫は開花後20日前後から始まりますが、各規格ごとに箱詰めを行い出荷します(写真4, 5)。選別の不徹底により市場での価格に影響が出るので、選別については十分徹底して行う必要があります。特に、共選(場合によって個人出荷においても)での品物の評価は各産地単位で行われるので、規格の統一、A級・B級品の選別の徹底は産地ごとに重要です。

どの品種においても収穫はM・S中心に行い、



写真4 S規格の箱詰2kgダンボール

(品種:スノークロップネリナ)



写真5 M規格の箱詰(同上)

穫り遅れを出さないようにします。穫り遅れた莢は、商品価値がなくなると同時に樹勢を弱める最大の原因となるので、仮に曲がり莢や変形莢が出た場合も、必ず樹から穫って、新しい花芽が付きやすくするよう管理します。

8 さいごに

野菜の供給が全体にだぶつき気味の中で、インゲンマメは市場からの要望が強い貴重な野菜の1つです。

それは1戸あたりの作付面積が、急激に増やせないことなどが市場の需要においつかない理由として考えられますが、小面積、少人数での新しい産地が各地にできてきております。

今後は、他の野菜同様、産地間の競争が厳しくなっていくことが予想され、各産地での地域にあった品種選定とともに、品質の高い商品の出荷体制づくりが必要かつ重要になっていくことでしょう。